

魯迅と村上春樹

東アジア文学における「阿Q」像の系譜

藤井省三
東京大学文学部教授

ジャパンファウンデーションは、昨年3月に国際シンポジウム&ワークショップ「春樹をめぐる冒険——世界は村上文学をどう読むか」を開催した。同プロジェクトで、柴田元幸、沼野充義、四方田犬彦の各氏とともに「案内人」を務めた藤井省三氏が、その成果もふまえて、村上春樹と魯迅の文学、そして中国との関係を論述する。

本

稿は20世紀東アジアにおいて、国民・市民・地域という相互に密接に関わるアイデンティティ形成を担った魯迅と村上春樹の文学作品を取り上げ、その系譜的關係を考察するものである。両者が共有する「阿Q」像はまず国民国家共同体を想像しつつあった1921年の新興北京文壇で誕生し、ポストモダンの入口にあって文学制度の転換期を迎えていた1980年代の東京で継承された。すなわち現代中国文学の父とも言うべき魯迅（1881〜1936年）が、中国新文学運動開始期に「阿Q」という日雇い農民像を創造し、作家デビュー直後の村上

春樹（1949年）が「民主国家」の「消耗品」としての「Q氏」という中間階級の人物像を再生産したのである。

辛亥革命前後の中国と魯迅の離郷体験

上海から汽車に乗り、南西200キロの杭州で南東に折れてからさらに60キロ進むと、長い歴史を誇る紹興に到着する。魯迅はこの街の地主の家の長男として生まれた。祖父は科挙（高級官僚登用試験）の最終試験を突破して政府高官も務めた。だが、19世紀末には魯迅の一族は度重なる災難により急速

に没落し、魯迅も科挙受験を拒否して、1902年から7年間、日本に留学し、東京で当時東アジアで最も欧化された都市文化を体験するのであった。（注1）

魯迅の東京時代とは日露戦争（1904〜05年）を挟んで、日本が近代的国民国家としての骨格を形成し、東京が新興帝国の首都として著しい変貌を遂げつつあった時代でもある。当時の日本では、交通・通信の革命的発展により、時間と空間とは著しく均一化され、情報が全国を短時間で駆け回り始めていた。そして情報の発信受信も教育制度と活字メディアとの急展開により、大活況を呈していた。

明治政府による1872年の学制發布後、小学校就学率は魯迅来日の1902年には92%、魯迅帰国の09年には98%に達している。中国の就学率は19年の統計でも11%にすぎない。09年の東京では『報知新聞』『万朝報』の発行部数はそれぞれ30万部と20万部に達している。いっぽう中国では14年の調査で北京紙はいずれも数百から数千部、上海紙で『新聞報』が2万部、『申報』が1万5000部を記録しているに過ぎない。魯迅はおそらく活字メディアの都・東京に目のくらむような思いを



ふじい しょうぞう ●東京大学文学部教授。中国・台湾・香港を始めとする中国語圏の文学を専門とする。著書に『魯迅事典』『中国映画』『現代中国文化探検』『中国見聞一五〇年』『20世紀の中国文学』など

撮影：高木あつ子

抱いていたのではあるまいか。

帰国後の魯迅はまず故郷の師範学校に勤め、辛亥革命勃発（1911年）の翌年には中華民国臨時政府の教育総長の蔡元培の招きを受け南京に出て教育部（日本の文科省に相当）の課長級官僚となり、臨時政府の北京移転に伴って5月北京に移動した。16年の袁世凱帝政復活とその頓挫を経て中華民国はその後10年あまり軍閥割拠の分裂期を迎える。

このとき青年たちの希望の地となったのが北京大学をはじめとする各大学・専門学校が集中する「文化城」北京である。19年にはこの北京の学生が先頭に立つて反日民族主義運動の5・4運動に立ち上がっている。

この前後に急成長した近代中国文学は5・4新文学とも称され、魯迅も衝撃的な短編「狂人日記」で北京新興文壇にデビューしたのち、次々と珠玉の短編群を発表していく。没落した家を引き払うために20年ぶりに故郷の小都市に帰った主人公の「私」が、幼馴染みで今や兵乱や重税による貧困のためでくの坊のようになった小作農民と再会して絶望と希望をめぐり沈思する物語「故郷」（21年）など、魯迅の多くの作品は故郷の紹興を舞台としている。

「阿Q正伝」（22年）も紹興付近と思しき村を舞台とする、次のような短編小説である。

未^{ウツヤウ}荘という村の日雇い農民で名前も定かでない阿Qは、村中の人からいじめられ笑いものにされているが、「我こそは自らを軽蔑できる第一人者」などと屁理屈をこねては自己満足していた。しかし跡取り息子欲しさに趙家の女中に言い寄ったため雑役もなくなり、県都（県は日本の郡に相当する行政単位）へ行き、盗賊をして稼いだ金を持って再び未荘に帰還する。一時は羽振りが良くなるものの、盗賊ではなくその手伝いにすぎなかったことが知られるにつれ、再び村人から馬鹿にされてしまう。その後、辛亥革命の噂にあわてふためく地主たちを見て阿Qも革命党に憧れるが、未荘では日本留学生だった若旦那らがさつさと革命党を組織してしまし出る幕もない。やがて阿Qは趙家で起きた強盗事件の犯人として逮捕され法廷に引き出され、本人も訳も分からぬうちに銃殺されてしまい、未荘の人々はこれを樂しげに見物するのであった。

魯迅はこの作品で自らの屈辱と敗北をさらなる弱者に転嫁して自己満足する阿Q式「精神勝利法」をペーソスた

用力的在自己臉上連打
兩下嘴巴



『豊子憎漫画魯迅小説集』で描かれた「阿Q正伝」の一場面。阿Qは祭りの夜、ばくちで負けたあと、自分の面を力まかせに叩く

つぶりに描いて中国人の国民性を批判するとともに、草の根の民衆が変わらぬ限り革命はあり得ないとする国家論を語ったといえよう。阿Qとは当時の中国人の多くを占める下層農民ばかりでなく、欧化途上にあった北京など都市の民衆、さらには魯迅自身をも含めた国民国家形成途上の中国人国民性を、厳しい批判と深い同情を以て描いているのである。

また、丸尾常喜は中国の民俗・宗教の深みにまで降りながら、魯迅は内なる「鬼（亡霊）」に苦しみつつ伝統的な

「鬼」の形象を巧みに借りて阿Qや孔乙己という孤独で寂しい人々を造形したと論じたうえで、阿QのQとは中国語で幽霊を意味する「鬼」に通じると指摘している。

フランスの作家ロマン・ロランは1926年に「阿Q正伝」に深く感動して涙を流したと言われるが、阿Qという幽霊は10代の村上春樹にも深刻な影響を与えたものと思われる。

日本の高度経済成長と 村上春樹の歴史の記憶

村上春樹は1949年生まれ、60年代末に故郷の芦屋・神戸を離れて東京の早稲田大学第一文学部演劇科に入學、小説『風の歌を聴け』（以下『風』と略す）を79年に発表して文壇にデビューした。その後、『羊をめぐる冒険』（以下『羊』と略す）（82年）などを発表し続け、87年刊行の『ノルウェイの森』（以下『森』と略す）は2006年8月までに総部数は856万冊に達し（注2）、「村上春樹現象」と称された。その後も『海辺のカフカ』（03年）、『アフターダーク』（04年）など旺盛な執筆を続けて、現代日本文学を代表する作

家となっている。

村上春樹が中国語圏で翻訳されたのは1985年、台北の雑誌『新書月刊』8月号においてであり、これは世界最初の村上文学の翻訳でもある。中国・香港・台湾の中国語圏における「村上現象」には四大法則が働いている。村上受容が台湾↓香港↓上海↓北京と時計回りに展開し、それぞれの地域で高率の経済成長がほぼ半減する時期に発生している点を、私は「時計回りの法則」と「経済成長踊り場の法則」と称している。

また中国語圏では、80年代末に民主化運動が勃発し、無血の改革により民主化を実現した台湾と、あの悲惨な89年6月4日「血の日曜日」事件で民主化の展望を失った中国と明暗を分けた。この民主化運動が各地の村上受容に、濃淡の差はあれ強い影響を与えており、私はこれを「ポスト民主化運動の法則」と呼んでいる。

さらに韓国も含めた東アジアでは『ノルウェイの森』が高く評価され早期に翻訳されたいっぽう、『羊をめぐる冒険』への関心は相対的に低く同作翻訳も遅れがちで、『森』高『羊』低の「法則」を導き出せよう。これに対し欧

米・ロシアでは対照的に「『羊』高『森』低」という法則が働いているのは興味深い。

村上文学に見られる 中国の影と魯迅の影響

そのいっぽうで、村上文学には『風の歌を聴け』「中国行きのスロウ・ボート」など初期から一貫して色濃い中国の影が見られる。98年には村上自身が台湾紙の東京特派員に対し、「僕の父は戦争中に徴兵されて中国大陸に行きました……僕はただ僕の記憶の影を書いていただけなのです。中国は僕にとって書こうと思っただけで想像するものではなく、「中国」は僕の人生における重要な「記号」なのです」と答えてもいる。「記憶の影」とは父親の日中戦争体験を継承することにより村上の内面で形成された歴史の記憶なのである。そして05年10月、『朝日新聞』記者に対し、村上は「僕にとって、日中戦争というか、東アジアにおいて日本が展開した戦争というのは、ひとつのテーマになっています」と回答した。（注3）

村上文学には中国の影が差している

ばかりでなく、魯迅文学の影響も感じられる。たとえば村上はデビュー作『風の歌を聴け』を「完璧な文章などといったものは存在しない。完璧な絶望が存在しないようにね」と書き出している(注4)。この言葉には魯迅が1925年1月1日に執筆した散文詩「希望」の中の「絶望の虚妄なることは、まさに希望に相同じい」(注5)という一句に通じる精神が感じられないだろうか。村上の口語体の言葉を「文章の未完なることはまさに絶望に相同じい」と漢文訓読風に言い換えてみると、村上があたかも魯迅の希望の論理を継承しているかのように思えるのだ。

村上と同じく『風の歌を聴け』冒頭の一節で、「しかし、正直に語ることはひどくむずかしい。僕が正直になるうとすればするほど、正確な言葉は闇の奥深くへと沈み込んでいく」とも記している(注6)。魯迅は「希望」を収めた散文詩集『野草』(1927年)の序文を「沈黙しているとき、わたしは充実を覚える。口を開こうとすると、たちまち空虚を感じる」(注7)と語っており、このような言葉の空虚さへの不安に村上は共感を示しているのではあるまいか。

実は魯迅文学は村上の愛読書であった。1992年11月のこと、香港人の比較文学研究者ウイリアム・鄭が、「アメリカ東部の小さな町」で村上春樹にインタビューを行なったことがある。村上は「僕が(日本文学を)読まない、読みたくなかったのは昔のことです……40代に入ってから、熱心に日本の小説を読み始めまして……古い世代では夏目漱石、ほかに谷崎潤一郎……(現代作家では)大江健三郎です。僕は彼を深く尊敬しています……ほかには安部公房がいます」と語ったのち、中国文学について次のように答えているのだ。「主に古典的名著で、少し読んだだけです。系統性などありません……今覚えている小説家は魯迅です。」(注8)

村上は自らの読書体験について「当時(一九六〇年代前半)僕の家は毎月河出書房の『世界文学全集』と中央公論社の『世界の歴史』を一冊ずつ書店に配送してもらっていて、僕はそれを一冊一冊読みあげながら十代を送った」とも語っている(注9)。この『世界文学全集』の第47巻は、「狂人日記」「故郷」「藤野先生」とともに、「阿Q正伝」と散文詩集『野草』など、魯迅の代表作で構成されているのである。10

代の村上が『世界文学全集』で「阿Q正伝」や『野草』を読んだ可能性は高いであろう。

「阿Q正伝」の阿Qと「駄目になった王国」のQ氏

それから約20年後の82年12月、村上は短編「駄目になった王国」を発表してQ氏を登場させた。語り手「僕」によれば、旧友Q氏は「僕と同一年で、僕の570倍くらいハンサムである。性格も良い……育ちも良い……服装の好みはとも良い……スポーツ・マンで……上手いピアノも弾く……大江健三郎なんかも時々読む……きちんとした綺麗な恋人がいた」というからには、典型的な中産階級子弟といえよう。「要するに一言で言ってしまうば……欠点のない人物である」Q氏は、欠点だらけの阿Qとは正反対の人物でもある。さて「僕」は大学4年生で転居して隣人のQ氏と別れ、10年が経過したのちにホテルのプールサイドで隣り合わせになるが、Q氏は「僕」に気づかない。この時のQ氏はテレビ局の「ディレクターのような職」にあり、「ちょっと有名な歌手だか女優」を番組から

降板させようと「出口」のない会話を続けるうちに、女性からLサイズ・カップのコーラをかけられてしまう。コーラの一部は「僕」にもかかり、Q氏は丁寧に詫言いで「僕」から温情ある許しを得ると、「昔と同じくらい気持ちの良い笑顔」を浮かべて帰って行くが、最後まで「僕」のことを思い出さない。そしてこの魯迅「故郷」を連想させる再会の物語を、村上は次のように結んでいる。

「僕がこの文章の題を『駄目になった王国』としたのは、その日の夕刊でたまたまアフリカのある駄目になった王国の話を読んだからである。『立派な王国が色あせていくのは』とその記事は語っていた。『二流の共和国が崩壊する時よりずっと物哀しい』(注10)

学生時代には「欠点のない」中産階級子弟であった人物が、会社の仕事のためにそれまでは親しかった女優に対し「不誠実」な態度を取り、彼に怒った女優から公衆の面前で侮辱されても、相変わらず「気持ちの良い笑顔」を浮かべているのだ。辛亥革命当時の中国の阿Qと比べれば、物質的に遥かに恵まれている現代日本の中産階級も、阿Qと同様に精神が麻痺していると、「僕」

は感じたのであろう。中産階級の子供は学生時代には「立派な王国」の後継者のように見えるが、エリート社員として働いて王国の後継者になると「色あせて……物悲しい」印象を語り手に与えるのである。

国民性批判と絶望感という二人に共通するテーマ

村上はさらに12年後の1994年6月、『ねじまき鳥クロニクル』第三部執筆のためモンハン事件(1939年)の現場へと取材旅行に出かけており、帰国後の旅行記で戦後日本で成立した「民主国家」、すなわち中産階級社会に対し根本的批判を加えている。

「戦争の終わったあとで、日本人は戦争というものを憎み、平和を(もっと正確にいえば平和であること)を愛するようになった。我々は日本という国家を結局は破局に導いたその効率の悪さを、前近代的なものとして打破しようと努めてきた。自分の内なるものとしての非効率性の責任を追及するのではなく、それを外部から力づくで押しつけられたものとして扱い、外科手術でもするみたいに単純に物理的に排除し



中国語圏では村上春樹の作品が多数翻訳され、読まれている。中国・上海で出版された『ダンス・ダンス・ダンス』(林少華訳)、台湾で出版された『ねじまき鳥クロニクル』(頼明珠訳)

た。その結果我々はたしかに近代市民社会の理念に基づいた効率の良い世界に住むようになったし、その効率の良さは社会に圧倒的な繁栄をもたらした。／にもかかわらず、やはり今でも多くの社会的局面において、我々が名もなき消耗品として静かに平和的に抹殺されつつあるのではないかという漠然とした疑念から、僕は（あるいは多くの人人は）なかなか逃げ切ることができないでいる。」（注11）

魯迅「阿Q正伝」と村上「駄目になった王国」は、ともに国民性批判という共通テーマを抱えているといえよう。そして二人はともに主人公に対し特に深い思いを抱いており、その屈折した感情をそれぞれ物語の冒頭で次のように述べているのだ。

「わたしは阿Qのために正伝を書こうという気になったのは、もう一年や二年のことではない。しかし、書く書こうと思いつきながら、つい気が迷うのである。それというのも、私が「その言を後世に伝える」ていの人ではないからである……そして最後に、わたしは阿Qの伝を書く気になったことに思い至ると、なんだが自分が物の怪けにつかれているような気がするのである。」（注12）

「Q氏という人間について誰かに説明しようとするたびに、僕はいつも絶望的な無力感に襲われることになる。僕はもともと物事の説明がうまい方ではないけれど、そういうのを勘定に入れても、なおかつQ氏の人間について説明するのは特殊な作業であり、至難の業である。そしてそれを試みるたびに僕は深い深い深い絶望感に襲われるのである。」（注13）

魯迅の「なんだが自分が物の怪につかれているような気がする」の原文は「彷彿思想裡有鬼似的」であり、これを直訳すると「頭の中に幽霊がいるかのよう」となる。「深い深い……」と深いを4回も繰り返す村上の「僕」の絶望感は、阿Qの幽霊に取り憑かれている、という魯迅の「わたし」の自覚に通じるものがあるといえよう。

また村上の91年の作品「トニー滝谷（ロンク・バージョン）」は、それぞれ青春期を戦時中の日本占領下の上海でジャズマンとして、戦後の高度経済成長期の東京でイラストレーターとして送った滝谷親子を描いている。「日中戦争から真珠湾攻撃、そして原爆投下へと到る戦乱激動の時代を、彼は上海のナイトクラブで気楽にトロンボーンを

吹いて過ごした……要するに滝谷省三郎は歴史に対する意志とか省察とかいったようなものをまったくといっていいほど持ち合わせない人間だったのだ」と描かれる父の省三郎は、戦前日本版の阿Qといえよう。そして60年代末の学園紛争期に「まわりの青年たちが悩み、模索し、苦しんでいるあいだ、彼は何も考えることなく黙々と精密でメカニカルな絵を描き続けた」（注14）その彼、すなわち息子のトニー滝谷とは、戦後日本版の阿Qであり、「駄目になった王国」のQ氏の分身といえよう。短編小説「トニー滝谷」については別の機会に詳しく論じたい。（注15）

本稿は魯迅、村上という作家のあいだの、これまで闇の中に置かれていた系譜的關係に光を当ててみた。東アジアのみならず、世界的な影響力を持った両者間の系譜的關係の解説は、今後の20世紀東アジア文学史の構想に対し一つの理論的枠組みを提示できるのであるまいか。魯迅に始まる東アジア「阿Q」像の系譜は、村上春樹を經由して現代香港映画のウォン・カーウアイ（王家衛、1958年上海生まれ）にも継承されているが、これについても別の機会に論じたい。☺

注

- ① 魯迅の伝記、研究史に関しては拙著「魯迅事典（三省堂、2002）」を参照
- ② ジェイ・ルービン著、畔柳和代訳「ハルキ・ムラカミと言葉の音楽」新潮社、2006年、444ページ
- ③ 拙稿「中国のなかの村上春樹」二冊の本、2006年9月号、2007年4月号連載予定、朝日新聞社、および「村上春樹のなかの中国（U.P.）2006年5、7月号、東京大学出版会」を参照
- ④ 「村上春樹全作品1979～1989」以下「全作品」と略す、講談社、1990年、7ページ
- ⑤ 「世界文学全集47 魯迅・茅盾」竹内好訳、河出書房新社、1962年2月初版、1965年8月12版、147ページ
- ⑥ 「全作品①」8ページ
- ⑦ 前掲⑤「世界文学全集47 魯迅・茅盾」136ページ
- ⑧ 鄭樹森「どちらかといえば私はいつも逆してきた——日本の小説家村上春樹インタビュー」我々向都比較反叛——専訪日本小説家村上春樹——台北「聯合文学」1993年1月号、40ページ
- ⑨ 村上春樹「本の話」③、ついで本を買うことについて「村上朝日堂」1984年7月初版、新潮文庫、1987年2月第1刷、1998年5月第31刷、136ページ
- ⑩ 村上春樹「カンガル日和」所収、「全作品⑤」115～120ページ
- ⑪ 村上春樹「近境」近境、新潮社、2000年6月1日第1刷、140ページ
- ⑫ 前掲⑤「世界文学全集47 魯迅・茅盾」33ページ
- ⑬ 「全作品⑤」115～116ページ
- ⑭ 「全作品⑥」227～228ページ、233ページ
- ⑮ 村上春樹は「若い読者のための短編小説案内」文芸春秋、1997年）の「長谷川四郎」阿Q正伝の章で、「短谷からの確な阿Q正伝」論を語っている。